



八坂神社境内にある第一海軍航空廠殉職者の「忠霊碑」(左)。霞ヶ浦第一海軍航空廠から特設航空廠等に派遣され、戦死された工員等69柱の慰霊の碑が1944(昭和19)年6月に航空廠内(第九工員宿舎附近)に建立された。題字は連合艦隊司令長官・海軍大将豊田副武。裏面に69柱の氏名が記されている。戦後住宅地の拡張に伴い、土浦市真鍋の現在地に移設された。

一空廠工員宿舎の払い下げを受け、現在地に移築された「阿見中学校旧校舎」(下)。



戦時下の土浦中学生10

～第一海軍航空廠勤務～(霞ヶ浦その22)

1944(昭和19)年初めから1945年8月15日までの間、第一海軍航空廠(一空廠)には軍人・工員・学徒・女子挺身隊員など、最大で2万4千名の人々が働いていました。今回は、一空廠に終戦まで勤務されていた長谷川芳三氏と田中蔵吉氏とのお二人に、高5回飯村と高21回松井・鴻巣がお話を伺いました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

第三工場木工班組長

長谷川芳三氏は、1915(大正4)年、岩手県紫波郡の生まれ。家業は建具屋で、丁稚奉公に出されていましたが、日中戦争が始まった1937(昭和12)年に上京、知人の伝【つて】で群馬県の中島飛行機製作所太田工場に入りました。中島飛行機は、当時、世界でも屈指の技術力を持っている航空機専門のトップメーカーで、「隼」や「零戦」といった陸海軍の飛行機の殆どを作っていました。

「結婚を機に家内の母親が住んでいた土浦へ移り、しばらくのんびりしていましたが、1940年10月、徴用工【ちようよう】戦時などに国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の業務に就かせること」として第一海軍航空廠(一空廠)へ引っ張り出されました。一空廠が、開戦に備えて、阿見に開庁される直前で、とにかく工員が必要だったのです。私は、中島での経験と技術を持っていたので、徴用されたのだと思います。

一空廠では、最初、工員養成所で鋳物の木型作りの訓練を受けました。それから飛行機部へ回されましたが、直ぐに横須賀の海軍工廠への出張命令を受けました。私を含めて3人が、横須賀へ研修のために出向しました。私が一番の新人工員で、あとは伍長格の人と組長格の人です。しかし、私は中島で実際に戦闘機の組立てを一通り経験していましたので、研修の内容はよく分かっていたので、横須賀でも半年間、鋳物の型作りの研修を受けました。もちろん飛行機の部品を作るための型です。一空廠に戻り、さっそく飛行機の部品作りをさせられました。

太平洋戦争が始まると、一空廠も戦時態勢となり、日曜日でも第1・3しか休めませんでした。7時から勤務です。小松ケ丘の工員住宅を自転車車で6時頃出ました。4時30分の定時に仕事が終わることはなく、毎日のように4時間の残業があり、弁当を2つ持って家を出ました。現在の自衛隊の関東補給処の敷地全部が工場でした。飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・工員養成所というように各部に分かれており、私たちがいた飛行機部の木工関係の部署は、第三工場に属していました。私の職場には私より古株の人が何名もおりましたが、飛行機に関しての経験は私が一番ありましたので、先輩を差し置いて組長をさせられました。兄玉という大尉さんが「お前は組長になっても先輩がたくさんいるのだから、あまり威張るのではないよ。」と仰ったのを覚えています。

1943年以降、戦局が厳しくなってくると、工場からも召集されて出征する人が出てきました。誰を出すかは組長が決めたのです。自分の組からは誰も出さくはないのですが、割り当てですから出さなければいけません。出征すれば生きて帰れる保障は全くないわけで、出征する人を選ぶのはたいへん辛い業務でした。工員が召集されれば当然人手が足りなくなりますが、それを補うために、養成所の生徒を繰り上げ卒業させたり、少年工も訓練を受けて職場へ配属されて来ました。少年工は小学校を卒業した位の年齢であったと思います。中学校や高等女学校の学徒も動員されて来ましたが、人手は足らなくなってきましたが、原料についての不足はあまり感じられませんでした。軍には最重点で物資が回さ

れていたのだと思います。原材料以外の物品についても同じようにありました。物品については会計部が管理していましたが、組長には命令権【請求権】がありましたので、用紙に必要な物品名を書いて、班長と係官の印鑑を貰って、会計部に持って行けば物品は自由に手に入りました。

勤労働員では、近隣の中学校・高等女学校の生徒さんたちがやって来ました。私の所には台湾からの学徒も来ていました。大学生は徴兵され、兵隊になって来ました。技術士官として赴任していたと思います。1年経つと少尉に任官しました。

空襲は1944年から始まりました。土浦の町は、幸い空襲を受けませんでした。一空廠は何回も艦載機の空襲を受けました。私の部署でも、第七宿舎にいた作田という少年工が空襲で亡くなりました。避難した防空壕から倒れている姿が見えるのですが、空襲警報が鳴っているために、遺体を取りに行けませんでした。空襲警報が解除になって、やっと遺体を収容し、広場に薪を積んで茶毘に付した時には、夏の盛りでしたので遺体はだいぶ傷んでおりました。その日は大房方面でも被害があつて、7名位亡くなったそうです。作田君の遺骨を骨箱に入れて、親元へ届けました。空間の在であったと思います。親御さんは『ご苦労さまです。』と丁寧に迎えてくださったって、ご馳走までしてくれましたが、お国のために死んだとは言え、今考えてみると、親御さんはどんなにか辛かったことかと思えます。」

工員

つくば市在住の田中蔵吉氏は、1929(昭和4)年生まれ。1944年3月、土浦尋常小学校高等科を卒業。同年4月に第一海軍航空廠工員養成所に第3期生として入所しました。

「実家の和菓子屋(清月堂)では、統制で砂糖などの原材料が入手できなくなり、休業状態でした。父・兄・姉の3人が航空廠に勤めており、養成所は航空機の修理工を養成する所だと言うので、早く手に職を付けようと工員養成所を希望しました。採用試験を経て入所した同期生たちは650名、関東近県から来ていました。工員養成所は現在の烏山四丁目一帯にあり、生徒は全員、養成所に隣接する寄宿舎(寮)から通学していました。所長は現役の海軍大佐で、海軍航空技術廠の出身者や一般嘱託教員・熟練工員が教育・指導に当たっていました。

工員養成所での日課は、5時起床、清掃朝食を済ませ、7時登校、朝礼の後、8時から授業が始まり、午前3時間・午後4時間の時間割でした。食事は3食とも寮で摂りましたが、食糧難の時代、麦飯と味噌汁・沢庵漬け程度で、とても満足できるようなものではありません。1班(クラス)50名位で、座学と実習とが1週間交代で組まれていました。座学には航空力学・物理・化学・生物・数学・国語・修身などの科目があり、旧制中学や専門学校で教えていた先生方が、嘱託教員として教壇に立っていました。実習では、一空廠の熟練工員が教官として指導に当たりました。授業が終わると寮に戻り、入浴・清掃を済ませ、夕食。夕食後2時間程の自習をして9時に就寝と

なりました。先輩が寮長を務めており、行動が遅いとか不始末を起こすと罰直(バッター)を食らうなど、予科練生と同じような生活を送っていました。1944年6月頃から勤労働員が始まり、土浦中学・麻生中学・土浦高等女学校・土浦女子商の3・4・5年生が、一空廠で働くようになりまし。中学生たちは寄宿舎に入れられて、私たちの寮の前を通って一空廠に通勤していました。小学校で1級上の先輩もいました。『勉強がしたくて中学校に進学した人たちが、勉強ができなくなり、勉強はあまりしたくなかった自分たちが勉強をさせられている』という皮肉な結果に複雑な思いでした。

身分は生徒でしたが、給料が出ました。日給65銭で、制服と作業服とは支給されました。食事代に1日50銭差し引かれましたので、月にすると4円程の給料でした。休日は2週に1回、午前8時から午後4時までの外出が許されました。小桜町(現桜町四丁目)の実家に帰り、映画を見に行く位しかすることがありません。しかし、家が遠方で帰れなかった仲間たちは、さぞ寂しかったことだろうと思います。

工員さんたちが徴兵されて【兄の豊吉氏も召集され、中国に出征していた。】、工員が不足したため、1945年3月、修業年限3年の予定が1年で繰り上げ卒業とされ、一空廠第一工場飛行機部に配属になりました。小桜町の実家を6時に出て、土浦駅から荒川沖駅まで常磐線の汽車に乗り、そこから歩いて一空廠まで通いました。7時授業開始、午後4時30分終了、6時30分までの残業、その後、更に8時30分まで残業、合計4時間の残業は当たり前になりました。日給は1

円30銭、残業代も含めて月50円位になりました。

新日鐵住金鹿島製鉄所に所蔵されている「桜花」のイラスト(左)と、その復元模型(下)。



一空廠では、民間の自動車工場などで働いていた熟練工の方が、班長や組長として、若い工員を統轄して作業に当たっていました。第一工場の飛行機部では、特攻機『桜花』の部品も作っていました。が、重要な部品は土浦四中付近にあった中村航空兵器株式会社【戦後、中村鉄工所と社名を変更した。】などの民間工場で作成し、航空廠で組み立てていました。秘密保持のため、製造工程ごとの連絡はなく、自分たちが作っている部品がどのように使われるのかは全くわかりません。『桜花』の完成品を見たのも1回だけでした。『桜花』は、胴体こそジュラルミン製ですが、翼は木製で、要するに、爆弾にロケットエンジンと翼とを付けた特攻兵器でした。その命中精度を高めるために、グライダー方式【ロケットエンジンの燃焼時間は約30秒しかない。】により、搭乗員が操縦できるようにした

もので、100%生還の見込みのない兵器【人間爆弾】でした。乗って行く人のことを思うと、何ともやりきれない思いでした。

上の方の人たちも、これではとても勝ち目はないと思っていたのでしょうか、工場ではあまり煩いことは言いませんでした。1945年になると、年配の軍人さんたちが工員として配属されて来ていましたが、皆さん農家の出身でしたので、機械のことは全く分からず、ぶらぶらしていました。私たちも、『仕事は私たちがやりますから。』と断っていました。

1945年以降、一空廠は艦載機のグラマンF6FやF4Uコルセアなどの空襲をたびたび受けるようになりました。空襲警報が鳴ると、防空壕に退避します。当番が防空壕の外で見張りに立つのですが、学徒出身の若い技術士官の方は、『危ないから防空壕に入っておれ。』と言ってくれました。艦載機による銃撃と小型爆弾の投下で、大型機体修理工場の屋根が吹き飛び、屋根の鉄骨はアメのように曲がってしまいました。飛行機部の工場の僅か50m程先に零戦が墜落した時には、爆弾が落ちたかと思いました。燃料切れで霞ヶ浦航空隊の飛行場に着陸しようとしたところを狙われたようです。同期生も何名か戦死しましたが、廠内には2万名以上の人が働いており、また厳重な報道管制が敷かれていたため、詳しいことはよく分かりません。茶毘に付されて、それぞれの故郷に帰って行ったようです。」

参考文献

「阿見と予科練」そして人々のものがたり「阿見町「茨城県の戦争遺跡」伊藤純郎編